

学友たちのお骨を拾い 「ひめゆりの塔」建立



35,000柱が合祀される魂魄の塔
上原文広所蔵(『大琉球写真帖』より)
那覇市歴史博物館提供

3月中旬頃、ひめゆり学徒隊の友人が井原第三外科壕(糸満市井原)で最期を遂げられたことを知らされ現場に駆け付けました。すでに米軍によって遺骨は焼き尽くされ、黒い岩陰を触ると遺骨らしいものがあるだけでした。焼け残った髪の毛の束やクシ、万年筆なども拾いました。翁長助静分校長を先頭に、先生方や高校生、収骨隊が協力して、壕周辺の草を刈り、縁には石を積み上げて、近くの野山から採ってきたテッポウユリの球根を植えました。これが「ひめゆりの塔」です。4月5日には「ひめゆりの塔」と刻んだ慰霊碑が建てられました。塔の名付けも石碑の文字も金城村長が書かれたものです。



建立されたばかりのひめゆりの塔(那覇市歴史博物館提供)

少年たちがミイラ状態で見つかった 「健児の塔」

ひめゆりの塔慰霊祭の2日後、男子師範学徒隊(教師をめざす13〜18歳の男子生徒による学徒隊)の最期の地が摩文

仁岳西方の断崖絶壁下の壕であることがわかりました。

壕の中はひんやりしていて、ミイラ状態の遺体も何人かいました。毛布にくるまっで抱き合っている2人の遺骨や、肉親だったらきつと見分けることができる状態の遺骨もありました。ミイラ状態の遺体を崩すつもりにはなれず、頭蓋骨をひとつひとつ丁寧に並べ、みんなで合掌し、その日は収骨せずに帰りました。その後、「健児の塔」が建立されました。



少年たちが最期を迎えた壕。中央にあるのは多数の骨。
(那覇市歴史博物館提供)

今を生きる人たちに伝えたいこと

終戦直後、自分たちも苦しい生活にありながらも、真和志村民が協力して遺骨収集にはげみ、「魂魄の塔」「ひめゆりの塔」「健児の塔」を建立し慰霊できたことは、私の人生の心の財産になっています。

私は戦後、小学校教師となり、民主主義教育に関わってきました。機会のあることに、戦跡地を案内し戦時中の様子や戦後の貧困の中で遺骨収集したことなどを語ってきました。

戦争には正義の戦などありません。当時の権力者たちの命令で始められ、立場の弱い人間が犠牲になります。

この世に生を受けるのは一度だけ、その大切な命を奪う戦争は絶対に許せません。死んでいった方たちはどんなに悔しかったことでしょう。戦争を起こすのは生きている人間、止めることができるのも生きている人間です。「命どう宝」。絶対に、二度と、こんな戦が起こりませんように願っています。

戦後77年目の慰霊の日を迎えるにあたり、国の沖縄に対する不平等な現状を見直し、基地のない平和な暮らしが続けられますよう願っています。

写真で見る戦場だった那覇

戦争では、見慣れた日常の風景が戦場になります。二度とこのような景色が繰り返げられないよう、私たち一人一人が戦争と平和について考えてみませんか。



那覇市歴史博物館提供

破壊された海洋会館前での米軍(現在の松山2丁目付近)



那覇市歴史博物館提供

泊小学校に突入する海兵隊員



那覇市歴史博物館提供

松山町的那覇地方裁判所(現在の松山公園)門前で戦う米兵



那覇市歴史博物館提供

当蔵のキリスト協会上階にたてこもる日本兵を攻撃する米兵



那覇市歴史博物館提供

奥武山を通り前線に向かう米第6海兵師団の兵士たち

